

日中科学技術

No. 56

1988. 5. 20

発行所

日中科学技術交流協会

〒113 東京都文京区湯島1-7-11

南新ビル6F TEL.(03)815-7241

野上茂吉郎記念交流基金 (略称野上基金)

第1回中国人留学生研究奨励金贈呈式

野上茂吉郎記念交流基金は、永年にわたり日中科学技術友好交流に貢献された故野上茂吉郎先生(元本協会理事・東大名誉教授)のご遺志により、ご遺族からお寄せいただいたご寄付を元に昭和60年11月に創設された。

野上先生のご遺志を末長く生かすべく、この基金の果実を用いて、毎年優れた中国人留学生1人に奨励状と研究奨励金10万円を贈呈することとし、昨年本協会会員からの第1回推薦を募集した。

今回は優れた業績を持つ候補者が多く、どうしても1名に絞ることができず、審議の結果、九州

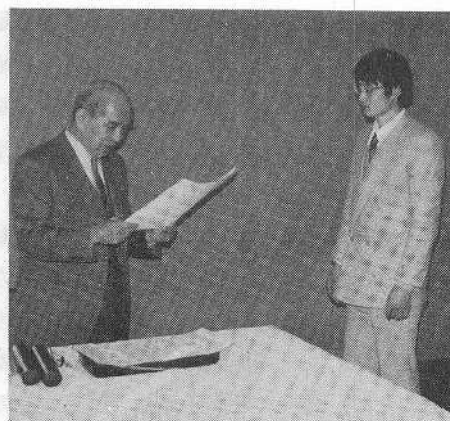
大学大学院農学博士課程後期3年次院生 呉少勇氏及び東北大学大学院理学系博士課程後期2年次院生 陸太進氏の2名に贈呈することとなった。

1987年12月17日、一ツ橋学会館で贈呈式が行われ、橋口会長から奨励状と奨励金が両氏に贈呈された。贈呈式には本協会理事のほか、野上正子未亡人と中国大使館科学技術担当 張宇傑参事官にもご列席いただいた。

以下に贈呈式の写真、奨励状のコピー、両氏から後日寄せられた感謝の言葉などを掲載する。



橋口会長から賞状と奨励金を受ける呉少勇氏



橋口会長から賞状と奨励金を受ける陸太進氏

野上基金研究奨励賞状の写し



研究奨励賞を受賞して

九州大学大学院生 吳少勇

昨年末、運良く第1回野上茂吉郎記念交流基金研究奨励賞を受賞した。これは5年半にわたる私の日本での留学生生活が終る数ヶ月前のできごとで誠に喜びにたえない。この機会を利用して、私の研究に終始適切なお指導ご鞭撻を下された恩師の江藤守総教授に心からお礼を申し上げたい。

また、いろいろお世話になった橋口隆吉会長を始め、日中科学技術交流協会の皆様に深謝する。

中国の大学で化学を4年間勉強した私は祖国で半年間の日本語教育を受けた後、1982年の秋に、中国政府派遣留学生として日本に向かった。北京から大阪へ、それから新幹線で博多へ、1日足らずで目的地についた。中国と日本の近さを初めて体験した。留学先の九州大学から温かい歓迎を受けて、当時存学していた20名前後の中国人留学生も学校、町などについて案内してくれた。

私が入った農薬化学研究室は実験が主で、私は日本語よりも実験に大いに悩まされた。なぜなら大学時代の私は勉強に夢中で、実験にはあまり関心はなかったし、その経験も非常に薄かったからだ。そのため、最初の時熱いオイルバスをこぼしたり、ガラス器具を割ったり、いろいろ失敗を起した。手などにけがをしたことも2・3回あった。

しかしこういう時に、先生と先輩たちは常にやさしく面倒を見てくれ、また実験器具を上手に扱うコツを教えてくれた。実験に慣れてからも先生が研究テーマ、実験方法などについてよく私に説明し、実験結果を報告するたびに先生から激励の言葉と、それからの進め方を教えて頂いた。

こうするうちに私は段々研究に自信がついて、なんの不自由もなくいろいろなことがやれるようになった。この間、中日両国の科学技術交流は急速に発展し、私も1984年秋に富士山の下で開かれた第2回中日農薬科学シンポジウムに出席し、このような交流に深く感銘した。私のいる九州大学にも今年在学する中国人留学生は300人近くになっており、5年ほど前より十数倍も増えた。こんな平和な時代にこんな優れた環境で留学できたことは私自身にとって非常に恵まれたことで、常に頑張らなくてはと思っている。今度の奨励賞に続いて、日本農薬学会からも奨励賞を頂くことになった。これらの名誉ある賞を留学生生活とともに、私の一生の貴重な思い出として、これからの研究にまたこれからの中日科学技術に力を尽していきたい。

研究奨励賞を受賞して

東北大学大学院生 陸 太 進

研究奨励賞を受賞して大変嬉しく思っています。また、立派な表彰式をお挙げ下さいまして誠にありがとうございます。また、橋口会長先生、張宇傑参事官先生から誠に丁寧なお言葉をいただき大変光栄に思います反面、私は学術的にはまだまだ素人で「新入社員」のようで何ひとつ業績らしいものは見出せず、ただ毎日できるだけ新しい知識を吸収し、新しいものを見出すように頑張っていますが今さらながら恥ずかしく感じられます。

私は今度の受賞をきっかけに、更に決意を新たに、真理の追求・科学の発展に微力を尽し寄与したいものと念願しまして懸命の努力を続ける覚悟です。受賞してから1ヶ月余り、私は一つ新しい駆動力を身につけたように感じて現在の課題研究をうまく進ませて行けるよう没頭して頑張っています。

中日両国は文化・科学技術の交流は歴史が古く中国と日本ではいろいろな分野でそれぞれ進んで

いる所や特徴などを持っており、例えば私が勉強している鉱物学では中国は豊富な鉱物資源があり、鉱床鉱物学などの研究は進んでおり、日本は鉱物資源が乏しいかわりに現代の分析機械や鉱物結晶成長理論などが進んでいます。お互いに「取長補短」で世界の鉱物学の発展に大きな寄与ができるでしょう。中国近代化のため及び日本の科学技術の一層の発展のため、両国間の科学技術方面の交流は意義深く、長く深く続けなければならないです。そのため若い知識人同士の交流も大切だと思っています。私は野上茂吉郎先生などの中日科学技術交流を行った先輩の方々のように両国の科学技術交流の一層広く深い発展のため微力を尽し、寄与したいと思っています。

私は浅学非才で今後とも一層皆様のご指導ご協力を得ましてこの光栄を辱めることなく精進してゆきたいと存じます。

最後に今まで御指導お世話になりました先生方、友人の方々に厚く御礼申し上げます。

野上基金 第2回中国人留学生研究奨励金 受領候補者募集

下記の要領により推薦された中国人留学生候補者の中から、本会選考委員会が1名を選出し、研究奨励金を贈呈する。

記

- 候補者の資格：日本の大学・研究所等研究機関に留学している中国人で、大学院（修士・博士課程）またはそれと同等以上の研究を行っており、日本の学会で最低1回の口頭発表を行っている者。
- 推薦：本会会員の推薦を必要とする。推薦者は以下の書類とそのコピー3部（計4組）を一括して本会事務局に郵送する。
- (1)会員の推薦書 (2)候補者の略歴 (3)候補者の日本留学中の業績（最低1件の口頭発表予稿前刷；印刷公表論文があればその別刷。業績全体の要約をA4版レポート用紙2枚程度に記述したもの） (4)参考資料（日本に留学する前に印刷公表した論文があればその別刷、中国語の論文でも可）
- 推薦受付締切り日：1988年9月30日（金）
- 奨励金等：奨励状と奨励金10万円を1名の留学生に贈呈する。
- 贈呈期日：1988年12月上旬

中国科学院 国際合作局副局長 崔泰山先生を囲む会

中国科学院国際合作局副局長 崔泰山先生は、永年にわたり科学技術における日中交流・合作に力を尽してこられた方である。

本協会は、中国科学院に対する日本側窓口の重要な組織のひとつとして、創立以来約10年間、同院と強い交流のきずなを保って来た。その間、崔泰山先生には常にいろいろとお世話いただいて来た。

昨年9月、本協会は創立10周年記念事業の一環として、「結晶成長と評価」に関する日中シンポジウムをつくば市・文部省高エネルギー物理学研究所において開催し、中国の研究者約20名をお招きした。その際、訪日団の秘書長として崔泰山先生にもおいでいただいた。

崔先生も定年が間近というお話なので、来日を機にシンポジウム終了後の9月19日に「崔泰山先生を囲む会」を東京神田の学士会館において開催することとした。

崔先生は、本協会の会員のみならず、日本人の間にも広く知られているので、この「囲む会」の開催に当り、会員以外の方々にも参加を呼びかけた。その結果、約50名の参加者を得て、非常になごやかで盛大な会となった。

「囲む会」はまず崔先生の日中交流に関する思い出を中心とするご講演に始まり、引き続き立食パーティへと移行した。

崔先生への記念品として、本協会からは鏡獅子の日本人形を橋口会長から贈呈した。



「思い出」を講演する崔泰山先生



鏡獅子の日本人形を記念品として橋口会長から崔泰山先生へ贈呈



第4回JECSS研究集会について

筑波大学生物科学系 高野 健三

JECSS (Japan and East China Seas Study の略)の第4回研究集会が、本協会などの援助のもとに1987年9月1日～5日に、筑波研究学園都市で開かれた。

日本海・東シナ海の物理・地質・化学・生物の研究者たちが、研究結果をもちより、討論を行い、情報を交換し、共同研究が望ましいことについては研究計画を作り、実行に移そうというのがJECSSの目的である。

JECSSは、完全に公開(誰でも参加できる)ではないが、非公開というわけでもなく、会則も会員資格もなく、自由で格式ばらず、ただ上の目的を旨とする人々の小さな集まりである。

過去4回の集会の時期、場所、参加者数はつぎのとおりである。

回数	時期		場所		
	中国	韓国	米国	日本	
第1回	1981.6.1～6.4	筑波大学			
第2回	1983.4.22～4.27	筑波大学			
第3回	1985.5.13～5.18	筑波大学			
第4回	1987.9.1～9.5	工技院 筑波研究センター			
	参加者数				
	中国	韓国	米国	日本	合計
第1回:	1	6	7	27	41
第2回:	6	7	6	27	46
第3回:	8	7	6	30	51
第4回:	15	9	7	33	64

日本海・東シナ海は、北西太平洋につらなる小さな海(縁海)であるが、北西太平洋の海況、とくに黒潮や黒潮にかかわるいろいろな現象を理解する上で重要な位置を占める。また、水産資源、鉱物資源、日本の気象・気候、海運にとっても重要な海である。しかし、経済専管200カイリの時代にあっては、一つの国が単独でこれらの海を研究することはしだいに難しくなってきた。公海だ

からといって自由に観測できる時代ではなくなった。国際共同研究、あるいは少なくとも情報やデータ、研究者の交流がぜひとも必要となる。

しかし、これらの海に面する国々の政治体制はまちまちであって、すべての国が正常な国交関係にあるわけではない。まがりなりにも日本はつきあいが広くて、日本で集会を開けば多くの国の人々参加できる。また、日本は古くからこれらの海を調査・研究しており、実績がある程度は集積されていることから、日本の役割は大きいはずである。しかし、現実には、共同研究・研究者の交流という点で、日本はアメリカなどにくらべて、ずっと出おけている。

このような事情をふまえ、アメリカのTexas A M Univ.のT. Ichiyeさんの呼びかけで、第1回研究集会が1981年に開かれた。変ないきさつから私はこれにまきこまれた。第4回は中国で開かれるはずだったが、結局、中国では開けない、と分ったのが1987年3月である。そうなるのをまったく予想していなかったわけではないが、日本での開催をあわただしく準備することになった。さいわい、本協会や工技院公害資源研究所などの方々のご協力で、何とか集会を了えることができた。

国際研究集会の格式や規模はさまざまであるが、JECSS研究集会ほど貧しいのはないだろう。集めることができた資金は、4回分をあわせて200万円に達しない。今回は準備の出おくれのため、とくに事情が悪かった。それでも、4回の集会を通じて、(1)外国人の宿泊は無料、(2)成田空港から宿舍・会場まで車で無料で迎える。(3)懇親会も外国人は無料、日本人も原則として無料である。ひるまの議論を続けたり、懇親を深めるため、だいた

い毎晩懇親会が開かれる。会の性格上、参加費は取らない。

かんじんなのは学問上の中味であるが、会をおって高くなっていると思う。JECSSがきっかけとなって、日本・中国・韓国・アメリカの間で進行中、あるいは計画中の共同研究がいくつもある。

Proceedingsについては、第1回は日仏海洋学

会の特集号として、第2回はElsevier Science Pub. B. V. から、第3回はPergamon Pressから出版されている。第4回は私が編者となって作成中である。

第5回研究集会は来年韓国で開かれる予定であるが、もし中国の研究者が参加できなければ、また日本開催となるだろう。

植物性タンパク・油脂・デンプンの新加工

技術に関する国際シンポジウム(北京)に出席して

兵庫女子短期大学食物栄養学科 藤野安彦

標題の食糧関係シンポジウムが1987年秋、工場見学等も含めて北京で開催され、引きつづき、有志参加による中国内旅行が行なわれた。国際的学術活動に強い熱意を示しつつある中国食糧学界の現況の一端を、この訪中報告を通じてお伝えしたい。

1. シンポジウム開催までの経過

85年に中国油脂学会が設立され、次いで86年にこれを含めて中国糧油学会が発足した。そのとき、当面の学会活動のひとつとして、87年になんらかの国際交流集会を行うことがうたわれた。これに基づいて中国糧油学会は標題のシンポジウムを企画し、その共催協力を国外の関係学術団体にも呼びかけたようだ。わが国は共催にまでは応ずるに至らなくて、結局、このシンポジウムは、中国糧油学会、中国科学技術連合、米国油化学協会およびベルリン工科大学の4団体の共催の形で行なわれたのであった。

2. シンポジウムの概況

期日・場所：シンポジウムは87年11月16日(月)～20日(金)の5日間、北京市友誼賓館内の科学ホールで行なわれた。またこの間に、市内の工場見学や、企業展示会、パーティ、パフォーマンス観賞などが盛りこまれ、さらにこの後に、2種の国内

ツアーも組まれてあった。

参加者：リストによれば、中国人144名、外国人77名、計221名であった。当初、中国人70名、外国人100名、計170名を見込んでいたようだから、国外からの参加者が予想を下廻ったので、国内参加者を増やしたと思われる。中国人の参加は、国内の主要な研究所、大学等に人数を割ふっていたようだ。わが国からは、福場博保お茶大名誉教授と筆者が日本油化学協会の代表として出席したほか、各分野から計22名の人が参加した。

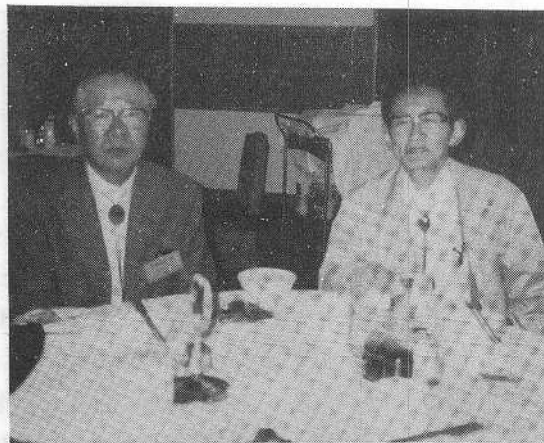


写真1：北京・友誼賓館(ホテル)の食堂で用談する福場博保代表(昭和女子大学教授)(左)と筆者



写真2：北京科学ホール（シンポジウム会場）のコーヒー・ブレイクで歓談する丁霄霖中国糧油学会副会長（無錫輕工業学院副院長）(左)と筆者

演題等：演題総数85（中国：30，外国：55）がタンパク質，油脂およびデンプンの3会場に分れて発表された。用語は，英語のみであった。中国人の講演は原著的なもの，外国人のそれは総説的なものが多かった。中国側には，このシンポジウムを通じて外国での食糧分野の最新の学術情報を知ろうという姿勢が強かったように思われる。筆者は油脂セッションで，昨年の中国油化学会での特別講演のつづきとして，穀物中の微量脂質の生化学的，工学的応用について話題を提供した。

3. 工場見学

シンポジウム3日目に植物油脂製造工場と大豆加工工場，4日目にハルサメ製造工場の見学が行なわれた。それぞれ中国での油脂，タンパクおよび炭水化物の伝統的加工技術の紹介という意味があったらしかった。設備は，多少は近代化されているものの，おおむね旧式のままのものが多かったように思われた。

4. ポスト・シンポジウム旅行

中国科学技術協会のきも入りで，北京市内（故宮博物館，天壇寺院，香山公園など），八達嶺（長城，明陵など），西安（兵馬俑博物館，陝西省博物館，大雁塔，小雁塔，刺しゅう工場など），桂林（疊綵山，芦笛巖，七星公園，象山公園など）および広州（陳氏書院，六榕寺，孫文記念館など）

への訪問旅行が実施された。別のグループは，西安と桂林の代わりに上海と杭州を訪ねた由である。航空事情が悪くて何便かのフライトがキャンセルされ，ゆえに途中都市への遅着が余儀なくされた。そのため筆者が依頼されていた訪問講演のうち，国立栄養研究所（北京）の分は実施できたが，国立油脂研究所（西安）および国立輕工業大学（広州）の分は中止されざるを得なかった。

5. 訪中雑感

訪中のたびに，この国には新しい発見がある。また，産業経済の急速な発展と，学術水準向上への意欲的な姿勢には，いつも感服させられる。しかし他方，因習的，遅速的な側面も散見されないでもない。ここには，後者のいくらかネガティブな断面について，あえて触れて見たい。

会場運営：座長が5日間拘束されればなしてであったり，細部の日程がよく変わり，かつそれが有効に周知されなかったり，パーティなどで特定の人びとだけがメイン・テーブルに坐り一般の人びとはジュッフェ方式のままに立ちんぼであったり，政府要人らしい人たちの挨拶がやたらと長かったりなど，国際的集会のあり方にまだよくなじんでいないらしいことがしばしば見うけられた。些事のようなのだが，次回に向けて，できるだけ留意改善してほしいことであると思う。

衛生観念：一流ホテルはよいとしても，2～3流ホテルや街なかで，トイレが不潔だったり，水洗がきたなかったり，トイレトペーパーがなかったり，ということが少なくなかった。また，食堂給仕人のぞんざいさ，街頭の物売りの手づかみ，男性達の痰の吐きすてなども気になることであった。中国のイメージ・アップのためにも，これらはぜひ改めてほしいと言わざるをえない。

結 び

いろいろのマイナス要因や不馴れな模索のなかで，中国側は，小規模とは言え，おそらく戦後はじめてと言ってもよい食糧分野の国際集会を主催して，ほんとうによくやり遂げたと思う。この体験をもとにして，ますます開かれた国際交流の場

をつかって行ってほしいと願う。もちろん日本側はそれに応分の協力をするであろうし、また日本側としても、そうした場をいっそう積極的に用意することになる。こうして、日中交流の輪がよいよ広がることを期待したいものである。

今回の訪中に際し日中科学技術交流協会からご援助をいただいた。記して謝意を表す。

参 考

- 1) 藤野安彦：日本油化学協会誌 36 (5), 366 (1987)。
- 2) 藤野安彦：日本農芸化学会誌 61 (4), 521 (1987)。
- 3) Fujino, Y., Ito, S. and Ohnishi, M.: General Topics of Lipids in Cereals (Lecture), 1st Annual Meeting of the Chinese Oil Chemists Society, Xian, China, Nov. 5-8 (1986).

「雲南省の民族植物学研究」

東京大学農学部 武 田 元 吉

筆者は植物育種学が専門であり、一度は遺伝資源の豊富な雲南省の植物を見学する機会を望んでいた。雲南省には中国科学院所属の昆明植物研究所、同熱帯植物園があり、今回この2ヶ所を中心に訪問する機会を得た。主な訪問先が育種学の専門機関ではなかったため、大勢の人達の前で講演することはなかったけれども、連日少数の人々と深い討議を行い、今回の訪問は相互に有意義であったと思われる。

訪中期間は上海経由で10月26日から11月7日までである。まず昆明市に至り、昆明植物研究所、雲南省農業科学院糧食作物研究所を訪問した。続いて昆明植物研究所研究助手郭輝軍君とともに南下し、思茅を経て西双版纳(シーサンパンナ)地方に入り、科学院熱帯植物園に2泊した。つづいて景洪市に滞在し自由市場、タイ部落、雲南省熱帯作物科学研究所を訪問した。

多岐に亘る交流だったので、以下に特記すべきことを2, 3あげる。

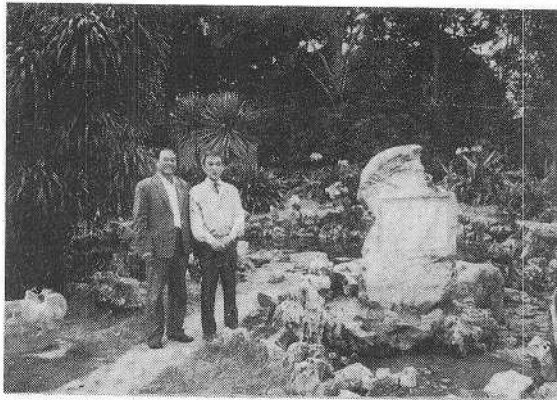
(1) 招待者となって下さった裴盛基先生(昆明植物研究所副所長)の主要研究分野は民族植物学(Ethnobotany)というもので、新しい研究分野

であり、筆者には極めて魅力的であった。裴先生は長く西双版纳の熱帯植物園の主任を務められた後、昆明へ転勤されて、新しく研究を発展させようというところであった。雲南省には少数民族が多いが、とくに西双版纳には12民族が長年月、夫々独自の農耕・生活習俗を保ってきた。植物資源が豊富な地帯であったために、これらの民族が長年の間に有用植物を見出して利用してきた。有用植物の種類としては木本の薬用植物が多いが、他に油用、食用あるいは草本性植物なども豊富である。これら少数民族が保有する貴重な遺伝資源を保存・調査し、さらに馴化栽培を行って利用を図るとともに、民族間の農業生態系の調和をめざす学問体系が民族植物学のようなものである。このような研究内容は一面では筆者の専門である育種学と接点を持つ部分があり、大変興味深かった。

(2) 西双版纳の少数民族の保有する有用植物は薬用50%、食用20%ぐらいである。その中でやや小さなプロジェクトではあるが裴先生が4年前に陸(水)稲育種を熱帯植物園内で企画され、公けに予算がついて、事業が進められている。これも少数民族向けの計画であり、民族植物学の幅の広さ

がうかがえる一例であった。育種をすすめている呉世斌氏とは十分に話し合い、今後の情報交換を約束してきた。1988年には第1回目の計画が終り、いくつかの新品種が普及に移されるようである。今後もプロジェクトは続けたい意向を裴先生は示しておられた。

(3) 昆明植物研究所は新しく機構改革が進められているところなので近い将来にどのようなようになるのか不明だが現在は総員約700名、植物生理学・



西双版纳熱帯植物園にて余彩氏と共に

植物化学・分類地理学・民族植物学・植物園(昆明および西双版纳)部門に分かれている。筆者に関係の深い植物生理学部門では段教授のもとで助教8人、全員で約40名が研究を展開している。Tiプラスミド、甘味植物タンパク、薬用植物組織培養、一般作物組織培養、細胞融合、キノコ類の研究などである。庄承紀先生から、観賞植物(君子らん、ツバキなど)やイモ類、いちごなどの説明を受けた。今後の情報交換が重要と思われた。

(4) 雲南省農業科学院糧食作物研究所も訪問した。陳所長からイネ・トウモロコシ・コムギ・オオムギなどの育種状況のお話をうかがい、私のほうからも意見を申し上げた。この研究所では今日中共同による粳稻(日本型水稻)の育種研究がすでに6ヶ年続けられている。

昆明植物研究所の李恒先生、趙揚氏、張壯鑫氏、熱帯植物園の余彩氏、龍乙明氏、陶達氏、雲南省熱帯作物科学研究所の陳劍雄氏など多くの方々と接触した。これらの方々に対し厚く御礼申し上げます。

中国の固体物理と放射光研究

文部省高エネルギー物理学研究所 宮原恒昱

報告者(宮原恒昱)は10月29日に成田を出発し11月10日に成田に到着するまでの間、中華人民共和国を訪問して学术交流を行った。

まず10月29日夜に北京に到着してから11月2日まで同地に滞在する間に、中国科学院の物理学研究所および高能物理研究所を訪問した。物理学研究所においては、高温超伝導物質の開発の現状やMBE装置の製作の現状および表面物理中心における研究開発の現状を見学するとともに意見交換を行った。特に、表面物理中心のような高価な機器を集中的に設置している施設における共同利用

研究のあり方について有益な意見の交換を行った。また同研究所においては、筆者らが行った放射光を用いた固体の光電子分光実験について、価数揺動を示す希土類化合物を例にとって講演を行い、結果の解釈について討論を行った。

北京高能物理研究所においては、建設中の2.8 GeVの電子陽電子衝突リングの見学を行うとともに、放射光用のビームラインの概念設計について意見を交換した。また特に、干渉性放射光の波動的性質とそれに対応した分光系の設計について講演を行い、有益な討論を行うとともに、北京で設

計されているローランド型分光器について検討を加えた。

11月3日早朝に長春にむかい、同地に2日間滞在する間に長春光学精密機械研究所を訪問した。同研究所においては、軟X線領域における光学素子評価装置(長さ70m)、ダイヤモンドターニング装置、回折格子用ルーリングエンジン、超高精度円周分割装置などを見学した。特に、軟X線用の光学素子評価装置や超高精度円周分割装置は、筆者の知る限り、わが国にないユニークなもので非常に参考になった。また、同研究所では、合肥の放射光用リングにとりつける分光器の試作を行っていることから、放射光と分光系との整合性および分光器の各種設計例について講演を行い、有益な討論を行った。

11月5日から7日までは合肥の中国科技大に滞在した。中国で唯一の放射光専用の加速器を建設

しているところで、入射器はすでに試運転に成功したばかりであった。電子蓄積リングについては、建物は完成していたが、各部品の据付けは1988年中に行うとの説明があった。また、中国科技大においては放射光用ビームラインのプロトタイプが建設されテストが行われていたが、速断バルブの性能は、わが国のそれを上まわるものであった。また同大学においては、放射光用の各種の分光器の設計原理と利害得失について講演を行った。特に同大学で検討されている回折格子分光器の設計について、つっ込んだ議論を行った。

11月8日および9日は上海に滞在した。同地では復旦大学物理学科の表面研究室を訪問し、これまで得られた成果について討論した。さらに同研究室の研究者をわが国に招待する可能性について議論し、これを推進することで意見の一致を見た。

中国・物理関係の研究所を訪問して

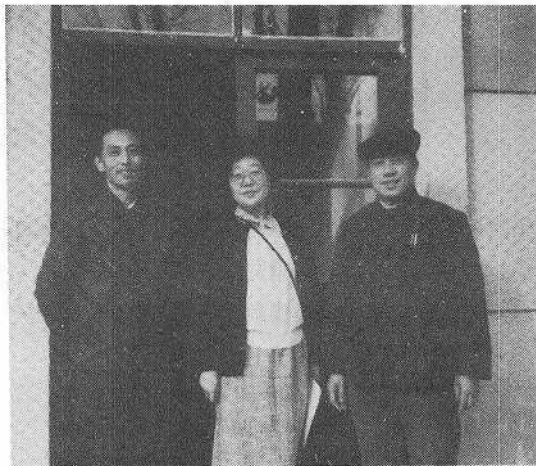
お茶の水女子大学理学部 伊藤厚子

この度、かねがね望んでいた中国訪問の機会を与えてくださったことに、まず、お礼を申し上げます。11月8日から22日までの約2週間の滞中で、北京、蘭州、上海の物理関係の研究所と大学を訪問させていただきました。本来の目的である「学術交流」にどれ程の実を上げ得たかは心もとないのですが、私にとって、全てが新鮮であると同時に、ふと郷愁に似た想いも交叉して、専門を超越した「学術交流」、それも一方的に私の輸入超過であったと感じています。専門外のことになりまますので、一端にとどめたいと思いますが、全く言葉の通じない外国で(努力をしないで出掛けた私に責任がある)、街の中で見かける交通表標や看板に書かれた短い文章などなどの80%以上が一見し

ただけで理解できる、この感銘は生涯忘れることのできないものです。古い時代にふんだんに漢語を輸入して日本語の中に調和させてしまったことなど、十分に承知していた筈なのですが、街角で、研究所の構内で、新鮮な感動が体の中を駆け抜けるのを禁じ得ませんでした。

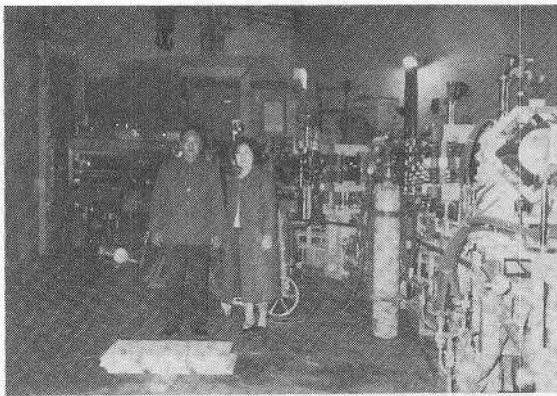
11月8日の昼過ぎに北京空港に着いて、14日の早朝まで北京に滞在しました。その間、物理研究所磁気部門の趙見高教授が至れり尽せりの面倒をみていただきました。物理研究所の他、北京大学へも御案内いただきました。いずれも磁性を中心に物性関係の研究室を見学させていただきました。研究条件は決してよいとはいえませんが、2~3年前から推進されつつある実験装置の近代化には

目覚しいものがあり、世界一流の真新しい装置がいくつも目につきました。一方で、古い輸入品の装置を所内で修理しながら大切に使い続けていました。また、外国留学で学んできた技術で手造りした装置も稼動していて、強い研究意欲を感じま



北京物理研究所にて、趙見高研究員・楊伏明研究員と筆者

14日から蘭州近代物理研究所、17日から上海原子核研究所と復旦大学を訪問させていただきましたが、いずれの研究所・大学でも、研究設備の近代化を急速なテンポで進めているのが印象的でした。最近はや应用研究に重点を置く方針が打ち出されているとのことで、基礎研究の傍らで、実用化と取り組んでいる姿を各所で見かけました。



蘭州近代物理研究所にて、建設中の重イオン加速器の前で張振康さんと筆者

2週間の中国滞在を思い返してみますと、100名を越す研究者の方々とお目にかかったのですが、

結局、日本語で説明して下さったのは、北京物理研究所でパルス磁場発生装置をみせてくださった楊研究員お一人でした。グループリーダーの殆ど全ての方が留学の経験をもっておられるのですが、留学先の半分はアメリカ、残りの半分がヨーロッパということで、日本に留学された方の少いことを痛感しました。最近では、日本の各大学で中国からの留学生が増えつつありますから、5～10年後には事情が変わるかもしれません。しかし近い国であることを考えると、中堅研究者の受け入れワクを大幅に増やして、気軽に研究に来ていただける体制を整えなくてはならないことを強く感じました。

中国訪問は大勢の方々の暖かい友情に迎えられて素晴らしいものでした。ほのぼのとした余韻を今も楽しんでいます。お世話になった方々に紙上をお借りして心から感謝申し上げます。

第15回理事会議事録

日 時：1987年9月21日(月) 13:00～16:00

場 所：一ツ橋学会会館 311号室

出席者：会長 橋口隆吉

理事 有山兼孝, 弥永昌吉, 小川智哉,
上坪宏道, 窪田雅男, 鈴木次郎, 和達清夫

以上のほか委任状提出出席 17名

1. 前回議事録承認
2. 結晶成長と評価シンポジウム報告
 - 日程：9/6(日) 中国側参加者来日, 9/7(月)～9/10(木) シンポジウム開催 ○参加者：115名(重複無し, うち中国国籍28名) ○見学：文部省高エネ研, 科技厅無機材研・電総研, 東大工学部, NEC(株) 基礎研, 理研 ○予稿集：約480ページ ○決算見込
3. 崔泰山先生を囲む会報告(9/19(土)学会館)
 - 第1部：講演会, 第2部：立食パーティ
 - 参加者：52名(中国大使館科技処4名招待を含む) ○記念品：協会より木目込人形(鏡獅子を贈呈)

4. 第3回日中加速器シンポジウム準備状況
 ○日程：11/16(月)中国側参加者来日, 11/18(火)～11/20(金)理研で開催 ○主催：理化学研究所
 ・本協会・放射線医学総合研究所の共催 ○後援：日本原子力産業会議 ○参加者：日中双方各30名程度口頭発表+ポスター発表
5. 日中生物科学シンポジウム「分子レベルにおける生体機能の調節・制御」
 ○主催：中国科学院上海分院と本協会の共催
 ○日本側参加者5名については本年度の科学院招待枠を利用する。(世話役の鈴木理事も参加の方向で検討を行う) ○希望日程：①12/13(日)～12/20(日), ②12/21(月)～12/27(日)
6. 野上基金第1回研究奨励金受領者募集(経過)について
 ○賞状の文案, 授与式形式, 選考方法などについては, 次回幹事会の席上改めて検討する。
7. その他
 ○菅野昌義新監事紹介 ○中国科学院派遣本年度枠の残り5名については, 各役員が候補者を紹介し早急に推薦を決定する。○次回理事会+野上基金授与式 12月17日(木)一ツ橋学会館

野上基金第1回研究奨励金贈呈式 および第16回理事会議事録

- I. 研究奨励金贈呈式
 日時：1987年12月17日(木) 13:00～13:30
 場所：一ツ橋学会館 306号室
 出席者：会長 橋口隆吉
 理事 弥永昌吉, 小川智哉, 窪田雅男, 藤田良雄
 中国大使館張宇傑参事官, 野上正子夫人
 行事：2名の留学生 陸太進氏と呉少勇氏(姓のローマ字順)賞状と研究奨励金各10万円を贈呈する。
- II. 第16回理事会
 日時：1987年12月17日(木) 13:30～16:00
 場所：同上
 出席者：会長 橋口隆吉

- 理事 弥永昌吉, 窪田雅男, 藤田良雄
 以上のほか委任状提出出席20名
1. 上記贈呈式へ至る選考等の経過報告
 2. 「第3回日中シンポジウム—核科学用加速器とその応用」の報告
 3. 「日中シンポジウム—分子レベルにおける生体機能の調節・制御」(上海にて)の報告
 4. 「第3回日中金属物理・物理冶金討論会」(上海にて)の準備状況
 5. 財政強化委員会の発足について
 6. 新疆ウイグル自治区喀納斯湖の大紅魚(哲羅鮭)調査(中国科学院新疆分院の事業)の後援
 7. 理事の追加委嘱：有馬朗人・久保亮五両氏
 8. その他

第17回理事会議事録

- 日時：1988年3月17日(木) 13:00～16:00
 場所：一ツ橋学会館 301号室
 出席者：会長 橋口隆吉
 理事 神原 周, 窪田雅男, 坂部知平, 藤田良雄, 和達清夫
 以上のほか委任状提出出席20名
1. 「日中シンポジウム—分子レベルにおける生体機能の調節・制御」(上海にて)の報告
 2. 中国国家自然科学基金委員会政策局 駱茹敏副局長との会談
 3. 中国における科学技術教育の現状に関する調査研究
 4. 中国科学院招待科学者の推薦：すでに7名決定しているので, 残りは保留して下半期の様子を見る
 5. 中国科学技術協会の要請による「製鉄における省エネルギー」に関する指導及び講演者の派遣について：新日鉄(株)生産技術部エネルギー技術企画室長 中川侃氏が内定
 6. 野上茂吉郎記念交流基金 第2回中国人留学生研究奨励金受領候補者募集(9/30, 〆切：12月上旬贈呈)

- 7.会計報告
- 8.財政強化委員会
- 9.山西省科学技術委員会訪日団：招待状発送、細部は未定
- 10.第4回日中民間人会議：4月27日～ 北京開催 会長出席
- 11.「酸化物高温超電導シンポジウム」：明年春、日本で開催を検討

第3回幹事会議事メモ

日時：1987年6月30日(火) 16:00～18:00
 場所：一ツ橋学会館 306号室
 出席者：委員長 橋口隆吉
 委員 上坪宏道, 窪田雅男, 鈴木昭憲
 春原亘

- 1.会長表敬訪中報告
- 2.結晶成長シンポ中国側進捗状況
- 3.同上中国科学院からの参加者
- 4.崔泰山副局長を囲む会
- 5.中国科学院招待10人枠(現1名)を年内に
- 6.中国科学院教育局訪日団
- 7.中国科学技術協会招待訪中団(製鉄産業における省エネルギー)
- 8.日中金属物理・物理冶金討論会共催(於中国)
- 9.停年退職者訪中募集(中国科学技術交流中心)
- 10.会報の中国配布先
- 11.その他

第4回幹事会議事メモ

日時：1987年8月6日(休) 12:00～16:00
 場所：一ツ橋学会館 309号室
 出席者：委員長 橋口隆吉
 委員 小川智哉, 上坪宏道, 窪田雅男
 土屋喜一

- 1.崔泰山先生を囲む会
 通知(案)について、他団体への呼び掛けなどを検討。

- 2.野上基金
 研究奨励金という形にする、一人10万円とする
 免状を作る、年末までに交付する、などを決定。
- 3.結晶成長シンポジウム
 プログラム、終了後の日程、寄付の状況などについて報告あり。
- 4.加速器シンポジウム
 理化学研究所主催とする、11/18(水)～11/20(金)
 開催、共催、後援団体などについて報告あり。
- 5.生物化学シンポジウム(科学院招待枠)
- 6.和達顧問申請
 JECSS シンポジウムに対する中国人科学技術者滞在費援助(10万円)承認。
- 7.科学院招待訪中専門家推薦について
 既に1名決定しており、生物化学シンポジウムで5名必要とするため、現在の候補6名から、今年4名にしぼる。
 シンポジウム及び公式団体訪中の場合は別として、単独科学院招待訪中は、原則として1件1名とする(従来慣行の確認)。
- 8.次回理事会 9月21日(月) 13～16時
 一ツ橋学会館 311号室

第5回幹事会議事メモ

日時：1987年10月15日(休) 17:00～20:30
 場所：一ツ橋学会館 311号室
 出席者：委員長 橋口隆吉
 委員 窪田雅男 鈴木昭憲 春原亘
 土屋喜一

- 1.中国科学院人材培養と交流考察団との懇談。
 10月5日学会館にて。(報告)
- 2.伊藤福夫氏(交流希望・非会員)の件
 有色金属傘下・中南工業大学客員教授の件
- 3.柴谷篤弘氏(交流希望会員)の件
- 4.生物化学上海シンポジウムの準備状況(鈴木)
- 5.野上基金奨励賞の応募状況と今後の進め方
 (審査方法等)1件につき、会長の他2人の先生に審査して頂く

6.経理会計中間報告(窪田)

7.その他

第6回幹事会議事メモ

日 時: 1987年11月25日(水) 17:00~20:00

場 所: 一ツ橋学会館 311号室

出席者: 委員長 橋口隆吉

委 員 小川智哉, 上坪宏道, 窪田雅男
鈴木昭憲, 土屋喜一

- 1.財政強化委員会(仮称)の発足(窪田)
- 2.野上基金奨励賞に関する件
 - a.候補者の選考(橋口他予備審査担当委員)
九州大学 呉少勇, 東北大 陸太進の2名
(旅費当方負担)
 - b.賞状文案(橋口)の検討
 - c.贈呈式の形式検討
野上夫人, 会長と会食の後
- 3.加速器シンポジウムの報告(上坪)
11/17~11/19, 中国人32名, 筑波地区, 阪大,
京大等の見学
- 4.生物化学上海シンポジウムの準備状況(鈴木)
鈴木理事も参加
- 5.昆明工学院李奮雄副教授(国家自然科学基金委
員会留学生)の件
協会を通じて留学したいと申出あり, 受入受諾
- 6.大紅魚(哲羅鮭)について
中国科学院に協力する方針をとる
- 7.日中金属物理・物理冶金討論会の準備状況
9/21~9/25 上海で開催, 詳細は後日(橋口)
- 8.結晶成長シンポジウムの収支決算見込
万博協会の補助は, 12月中に交付予定
- 9.理事追加委嘱について, 次回理事会にかける
- 10.その他

第7回幹事会議事メモ

日 時: 1988年1月12日(火) 15:30~19:30

場 所: 一ツ橋学会館 305号室

出席者: 委員長 橋口隆吉

委 員 窪田雅男 坂部知平 鈴木昭憲

- 1.分子レベル・生体機能討論会報告(鈴木)
- 2.1988年, 科学院招待者の推薦(全役員から)
- 3.1988年度学术交流(討論会等)の検討
- 4.野上基金第2回奨励賞について
- 5.会報原稿執筆依頼
- 6.個人会員入会勧誘
- 7.財政強化委員会(仮称)の発足
- 8.その他

第8回幹事会議事メモ

日 時: 1988年2月26日(金) 15:00~17:30

場 所: 一ツ橋学会館 309号室

出席者: 委員長 橋口隆吉

委 員 窪田雅男 鈴木昭憲

- 1.財政強化委員会(窪田)
- 2.中国管理科学研究会訪日団との懇談(鈴木)
駱茹敏理事長他2名
- 3.中国に於る科学技術教育の現状に関する調査研
究について(小川)
- 4.中国科学院招待への理事からの推薦
池田(小川), 半谷(有山・橋口), 大津賀(弥永),
八百(小川), 松崎(春原), 間瀬(有山)
- 5.中国科学院招待への応募者
柴谷篤弘
- 6.野上茂吉郎記念交流基金研究奨励金(第2回交
付)の件
- 7.3月理事会(3/17 13:00~)議題の検討
- 8.その他

第1回財政強化委員会議事メモ

日時：1988年2月26日(金) 18:00~20:00

場所：一ツ橋学士会館 309号室

出席者：委員長 窪田雅男

委員 橋口隆吉会長 鈴木昭憲理事

河野拓夫 (新日本製鉄株), 平野宰次
(元国際電気), 小野公(株)先端加工機械
技術振興協会), 福田好朗(株)機械振興協
会技術研究所)

1. 橋口会長挨拶

2. 窪田委員長挨拶と委員会の目的について

事業を活発に行うには、財政的強化が必要であるので、当委員会が設立された。

短期的な財政強化だけでなく、長期的な事業も検討していきたい。

3. 財政強化に関する討議 (○印は決定事項)

・賛助会員の勧誘を積極的に行っていなかったの
で、会員に偏りがある。

○河野委員と橋口会長とで製鉄大手4社(川鉄・
住金・日本鋼管・神鋼)にアプローチする。

・業界をいくつかに分類して、組織的に勧誘した
らどうか。(鉄鋼・非鉄・電機・化学・機械・石
油・プラントなど)

○とりあえず鉄鋼は、橋口会長、河野委員、電機
は平野委員が中心に検討する。

・第1回の委員会であるので、フリーディスカッ
ションを行ったが、これらの問題点をもとに活
動を具体的にやりたい。できれば一年で賛助会
員を倍にしたいと考えている。

4. 未納者リストの検討

5. 委員会の開催について

2か月に1回の割合で開催したい。多忙の方も
多いので、出席できない場合は、代理の方の出
席をお願いできれば有難い。

6. 次回の開催について

4月21日(木) 18時から、学士会館において

財政強化委員会委員名簿

委員長 窪田雅男 理事

委員 橋口隆吉 会長

小川智哉 理事

小野 公 (株)先端加工機械技術振興協
会専務理事

上坪宏道 理事

河野拓夫 新日本製鉄株取締役

坂部知平 理事

柴田 淳 理学電機株 研究開発部長

鈴木昭憲 理事

春原 亘 理事

土屋喜一 理事

平野宰次 会員 元国際電機株取締役

福田好朗 (株)機械振興協会技術研究所
システム課研究員

中国管理科学研究会訪日団との懇談

国家自然科学基金委員会政策局副局长駱茹敏女
士を団長とする管理科学研究会訪日団から、2月
4日訪問したいとの連絡があった。当日、橋口会
長急病の為、鈴木昭憲理事が、ガーデンパレスで
同訪日団と懇談を行った。懇談には、駱茹敏管理
科学研究会理事長、崔俊管理科学研究会副理事長、
通訳の劉幸宇氏、及び日本側受入機関・神鋼事務
機株の堀宏規氏が、協会からは、鈴木昭憲理事と
事務局1名が出席した。

駱団長から、訪日団の目的等について話を聞い
た後、管理科学という言葉の内容、及び駱団長が
政策局副局长をしている国家自然科学基金委員会
についても話が及んだ。

管理科学という言葉は、非常に広い意味で使わ
れ、政策までも含むというお話であったが、日本
には馴染がない言葉なので、何か文章があれば送
って頂きたいとお願いした。また、国家自然科学基金
委員会について、会員に周知させたいので、
資料の送付をお願いした。その後、日中の研究費
の支払い方の違いなどについても話をし、懇談
を終えた。

< 会 告 >

◎ 第3回日中金属物理・物理冶金討論会

- 日時：1988年9月21日(水)～25日(日)
26日(月)～30日(金) 観光旅行
- 場所：中華人民共和国・上海
- 日本側主催組織：日中科学技術交流協会
- 日本側世話人：橋口隆吉(東理大), 竹山太郎(在中国), 石田洋一(東大生産研)
- 企画概要：21日(水) 夕刻ビューフェ式レセプション, 22日, 23日, 25日討論会。24日(土)上海地区研究機関見学。
- 費用：〔参加費〕討論会参加者 ¥ 22,000
同伴の非研究者 ¥ 6,600。
- 会議後観光旅行。但し, (2)は人数による。
(1) 黄山(中国第一級の自然観光地) ¥26,600/人。
(2) 杭州-瑤琳仙境。 ¥ 19,200/人。
- 登録：最終登録の締切は1988年6月15日。
必要書類は, 協会事務局へ御請求下さい。

◎ 講演会のお知らせ

- 講演者：Liang Dong-cai (梁 棟材)
中国科学院生物物理学研究所教授, 中国科学院会員
- 講演題目：The Structure and Function of Insulin and its Derivative (インスリン及びインスリン誘導体の構造と機能)
- 日時：昭和63年6月10日(金) 15:00～16:30
- 場所：東京大学薬学部3階会議室
- 世話人：東京大学薬学部 三井幸雄先生
(TEL: 03-812-2111, EXT 4842)
- 主催：東京大学薬学部物理分析教室・日中科学技術交流協会
- 棟教授は, 中国におけるインスリン研究のうち当初よりX線結晶構造解析グループの長として文化大革命の前から現在に至るまで, 活躍されている方です。また1983～86年まで中国科学院生物物理学研究所所長を務められました。

目 次

野上茂吉郎記念交流基金(略称野上基金)		
第1回中国人留学生研究奨励金贈呈式	1	
研究奨励賞を受賞して	2	
研究奨励賞を受賞して	3	
野上基金第2回中国人留学生研究奨励金		
受領候補者募集要領	3	
中国科学院国際合作局		
副局長 崔泰山先生を囲む会	4	
第4回 JECSS 研究集会について		
高野 健三	5	
植物性タンパク・油脂・デンプンの新加工		
技術に関する国際シンポジウムに参加して		
藤野 安彦	6	
雲南省の民族植物学研究	武田 元吉	8
中国の固体物理と放射光研究		
宮原 恒昱	9	
中国・物理関係の研究所を訪問して		
伊藤 厚子	10	
第15回理事会議事録	11	
第16回理事会議事録	12	
第17回理事会議事録	12	
第3回幹事会議事メモ	13	
第4回幹事会議事メモ	13	
第5回幹事会議事メモ	14	
第6回幹事会議事メモ	14	
第7回幹事会議事メモ	14	
第8回幹事会議事メモ	14	
第1回財政強化委員会議事メモ	15	
中国管理科学研究会訪日団との懇談	15	
<会告>日中金属物理・物理冶金討論会	16	
梁棟材・中国科学院生物物理学研究所		
教授講演会のお知らせ	16	